
天河に落ちる

穂邑雪奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天河に落ちる

【Nコード】

N7756G

【作者名】

穂邑雪奈

【あらすじ】

誰も知らないもうひとつの七夕伝説。正しいのかどうかは誰も知らない、牽牛と織女の物語。

序（前書き）

人によっては嫌悪を催す概念、後半部分に直接的じゃないんですが流血部分を含む表現が含まれます。ご注意ください。

序

人は忘れる生き物である

先達の言葉は正しい

いくら悲しもうといくらあがこうと

いくら留めようといくら縊ろうと

残酷なまでに 否 　　いつそ優しいと思えるほどに正しいのである

幼い頃の記憶があったとする

それはいつでも取り出せるし、いつでも寸分の違いもなく再現できるほどに鮮明である

だが大人になってそれを周囲の大人　たとえば親　に確認してみると愕然とするほど事実と異なっていたりする

語る者本人の中の、一個人の歴史ですらそうなのだ

その目で見たこと、その肌で感じたことをその口で語る者が失われた物語は、日々、歪み失われ崩壊しては、それを補うべく、強引に付加され再構築されていく

そうして今尚残る伝説はしかし原形を留めてはいない

ここに一つの物語がある

これが正しいのかどうか、それは誰にもわからない

語り手である私にもだ

なぜならこれも既に失われた物語だからであり、その破片をたまに私が拾っただけに過ぎないからだ

それでも私はこの物語を語りたいと思う

この物語は一般に広く語られるものとは多分に異なっているし、
おそらくはその物語と同じくらいに元の事実からかけ離れているの
だろう

もしくは実際にあったことなのかすらわからない

これはそういう物語である

序（後書き）

ジャンルを決めにくいことこの上ありません。

壺

聞いたか。天の姫のこと

おお、聞いたとも。姫君がこのところ、性に似合しあわず、荒れ狂うておられるそうな

男は、壁の向こうから聞こえてきた話し声に目を瞬しばたいた。

彼は丁度、彼が世話をする牛らを厩舎に連れ戻してきたところであつた。男の名は牽牛、天帝の牛の世話をする牛飼いである。一日を外で過ごし眠たそうな牛たちを、日々繰り返すとおり小まめに手入れをしてやつていたところへ、壁越しに冒頭の会話が聞こえてきた。牽牛は思わず壁へ近寄つた。会話をしているものはおそらく二人組みの男、天の宮城に使仕える官吏か誰かだろう。向こうも壁に寄つて話をしていゝらしく、壁に耳を押し付ければ、壁越しでも押し殺した囁き声が聞き取れた。

（姫君が どうしたのか）

話に登場する天帝の姫君といえは、織女だろう。

彼の、牽牛の妻であつた。

もう、どれほどの間会っていないのだろう。

お可哀想に、夫君に会いたい、会いたいと仰られ、会えねばこのまま焦がれ死ぬと、日々瘦せ衰えておられるそうな

天帝も不憫な真似をなさる。何ゆえ、斯かほどに仲睦まじうていらした夫婦を引き裂かれるのやら

（どういう意味だ）

牽牛は眉を顰ひそめた。彼らの話は、彼に今まで伝えられていた話とはあまりにも異なつた。

牽牛が織女を娶つた折には、天の朝廷は大騒ぎであつた。牽牛は身分の低い牛飼ひ、対して、織女は天でも名高い機織の名人であり、

それ以上に、天帝の大事な一人娘　あまりにも身分の違う二人であつた。しかも、その二人を娶めあわせたのは、天帝本人であるという。何を考えておられるのやら　そんな言葉が朝廷のそこかしこで囁かれた。

二人の立場が違いすぎる、うまくいくはずもない　そんな声も良く聞かれた。

しかし、牽牛は実直な男であり、織女は真面目な娘であつた。婚姻の後も、昼間は牽牛は常のように牛を飼い、織女は天の宮殿で機を織つた。そして、夜になると、二人は宛がわれた住まいに戻り、仲睦まじく暮らした。周囲にとっては衝撃的な婚姻にも関わらず、夫婦の生活は好調であり、二人の評判は至つてよいものであつた。

牽牛は美しい妻を心から愛していたし、織女も、誠実な夫を愛していた。身分の差異は、二人の生活の上では殆ど問題にならなかつた。二人はともにいることで幸福であり、若い二人の蜜月はいつ終わるとも知れなかつた。

ある日突然織女が天帝に呼び出されたのは、そんな折であつた。父の召還に応えて天の宮城に赴いた織女は、以来牽牛の待つ夫婦の住まいに戻ることはなかつた。

織女に何があつたと宮城に問えば、織女は身体の不調を訴えて臥せつていと言われる。一度はそれで引き下がったものの、あまりにも長く帰らぬので心配になり、せめて一目でも、ともう一度会いに行つた。すると、応対に出た官は冷たくこう言い放つたのである。「姫君は最早貴殿とはお会いにならぬと、もはや貴殿は夫でもないと、そう仰られておる」

牽牛はただ愕然とした。

妻が、己に会いたくないと、そう言っている。

彼とは夫婦ですらないと言っている。

その事實は、彼を一瞬で打ちのめすだけの威力を持っていた。言葉もなく呆然と立ちすくむ彼を侮蔑の視線でちらりと見ると、官は彼の目の前で扉を閉めた。

それがいつのことであつたろうか。ずいぶんと前だつたような気もするし、つい昨日のことかもしれない。あれ以来すっかり腑抜けで呆けてしまつた牽牛は、日にちすら数えていない。ただ、何も考えずとも体が勝手に日々彼のすべきことを覚えており、頭が虚ろになつた状態でも黙々と仕事ばかりは片付けているのである。

（私を　彼女がもう夫とは認めぬのなら）

虚ろな牽牛の心に去来する思いは、ただ今は遠い妻のことばかりであつた。

（この身はなぜ今もこうして生き長らえているのだろうか）

彼は死すら願つた。しかしたかが牛飼いといえども天の住人である牽牛は、容易く死を選ぶことは許されない。地に住む者達とは寿命もその命の重さも異なつた。

（こうして彼女を思いながら情性に任せて繰り返す日々を、あとどれほど続けなければならぬのだろう）

元は物静かながらも朗らかであつた牽牛は無口になり、誰とも目を合わせなくなった。青年のあまりの変貌ぶりを心配した仲間が声をかけてもぼんやりと「何でもない」と繰り返すばかりで、手に負えないと友人らも判断し、終いにはただ遠巻きに牽牛を見守るばかりになつた。

式

そんな彼の耳に、突然飛び込んできたのが最前の会話である。

もし　もしも彼らの会話が真実だとすれば、いつぞやの官が牽牛に告げた言葉は虚偽である。

『姫君は最早貴殿とはお会いにならぬと、もはや貴殿は夫でもない
と、そう仰られておる』

織女は、未だ彼のことを愛し、彼に会いたいと言っているのだ。

そうだ、冷静に考えてみれば、おかしいのである。織女は誠実で思いやりに溢れた女性だった。天の宮城の奥深く、何の不自由もなく慈しまれて育ったにも関わらず、何事においても決して無闇に己の我を通そうとすることはなく、牽牛と二人、双方が納得するまで何度も話し合った。何か過ちを犯せば、隠すこともごまかすこともせず真つ直ぐに謝った。

そんな彼女が、離縁などという重大事を牽牛に言い渡すことを、人伝に任せるはずもない。必ず、どんなに心苦しかろうとも逃げ出さず、自らの口で、真つ直ぐに牽牛の目を見ながら言つに違いないのだ。

織女を愛し愛された牽牛がそれに気づかぬとは。驚愕に打ちのめされていたとはいえ、牽牛は己の愚かさを呪いたくなった。

しかし、それならば。

（なぜ織女は帰つてこない）

一度^{ひとたび}気づけば疑問はいくらでも湧き上がった。

（官が織女からの言伝と言ったあの離縁の言葉はいつたい）

それに加え、盗み聞いた会話の内容も気になった。

（天帝も不憫な真似をなさる、とは）

どういう意味だろう。

何か形のない、黒い疑念が牽牛の胸で形を成そうとしていた。

再三、牽牛は天帝の宮城に赴いた。

出迎えた官にどうしても一目妻に会いたいと嘆願したが、『姫君はそれをお望みではない』と素気無く断られるばかり。しかし、夫婦の道理から言えば、そのような一方的な言い分が通るはずもないせめて離別を言い渡すことくらい直に対面すべき、と理を説いてみたものの、天帝の一人娘、という彼女の身分を考えれば、一介の牛飼いに対して道理を曲げることも大目に見るべきだと、そういった意味のことを遠回しに言われた。

牽牛の中の不信心は膨れ上がるばかりだった。

（これは、織女の言葉ではない。彼女の言葉ではありえない）

彼女と自分の間に、大きなものが立ち塞がっている。

ならばせめて天帝に、と牽牛は訴えた。織女と婚姻を結んだのは天帝の勧めによってである。

「陛下のお勧めによって成った婚姻を、我が不徳で破談にしてしまったことをお詫びする義理がございます」

そこまでするほどのことでもなかう、と押し留めようとすると官を押し切り、牽牛はなんとか天帝に目通しが叶うことになった。

参

天帝は三方を帳とばしで、残り一方を白い壁で囲んだ小さな室房で待っていた。

そういえば、初めて天帝に拝謁したのもここだったと牽牛は思い出す。あの時は、牛飼いの風情に、天帝がいったい何の用か皆目わからず、ただただ当惑していた。さらには、天帝に、娘の婿となつてほしいと切り出され、開いた口が塞がらなかった。

そなた以上に、娘に見合う男がおらぬ

私はただの牛飼いです。姫君につりあう、身分の貴き方々はほかにおられますよう

身分など問題ではない。そなたの人柄が気に入ったのだ。多少わがままな娘だが、そなたなら安心して預けられる。どうだ、頼まれてはくれぬか

そうして、牽牛は織女と婚姻を結ぶことになったのだった。

そのときはただ驚愕と、美しく優しい妻を得た幸福で深く考えることもなかったが、よくよく考えれば腑に落ちない。

(天帝も不憫な真似をなさる)

天帝に対する疑念が胸の内にある今なら、尚更だ。

牽牛は、まさに地味で目立たない、静かな男だった。堅実さと誠実さだけが取柄のようなものだが、たとえそれを主眼として婿がねを選んだとしても、数多いる天の貴族の中に人柄の良い者がいなかったはずがない。そこであえて身分の低い凡庸な男を選ぶ理由がわからない。たまたま、織女が素直かつ聡明で、人を身分などで差別しない性格だったからよかったようなものの、尋常に考えれば、うまくいかなかった可能性のほうが高い。

牽牛が天帝に対し礼を取ると、天帝は開口一番済まなさそうに詫びた。

「すまぬな、牽牛。娘のわがままゆえにそなたを困らせる」

「どういつ、意味でございましょうか」

いっそ無邪気ともいえる調子で問い返されて、天帝は戸惑い気味に口ごもる。

「どういう意味、とは……」

「陛下がわたくしごときに詫びなければならぬようなことなど、ございましたでしょうか」

「我が娘が、織女がそなたとはもう居とうないと申して、そなたの元を無断で出ていったではないか」

「そのことなら、わたくしは深く気にしてはおりませぬ」

「なんと」

牽牛の殊勝な物言いに、天帝の眉が跳ね上がった。

「娘を許すと申すか」

「許すも何も」

牽牛はゆっくりといいながら、天帝の目を窺う。

「妻は、いずれ我が元に帰ってくるでしょうから」

ほんの一瞬ひらりと天帝の目の奥に閃いたのは 何なのか。牽牛がそれを認めたと思ったときにはもうそれは隠されており、牽牛にはそれを見たことすら本当なのかわからない。

「そう、思うか」

「はい。陛下もご存知でございましょう、陛下のご選定は正しゅうございました。わたくしと妻はこれ以上ないほど幸せな夫婦にございました」

「だが織女は最早そなたの元へ帰りとうないと言っておる」

わざと本心以上に余裕を持たせた口調で、牽牛は天帝に笑いかけた。

「何かの間違いでしょう。さもなくば一時の気の迷い。ご安心召されませ、妻は必ずわたくしの元へ帰り来ます。それまでほんのしばらく、妻の気紛れにおつきあいくださいませ。このたびは、そのことをお願い申し上げるために参りました」

天帝の心を量るために苦し紛れに選んだ言葉だったが、口にして

みると実際そうに違いはないと思われてきた。

そうだ　織女は自分の妻であり、自分は織女の夫なのだ。娶わせたのは天帝だが、愛し合ったのは自分たちだ。

「さらばそなたの家で織女の帰りを待つが良い」

急に天帝の態度が変わる。

妻に逃げられた哀れな男を労わる態度から、邪魔者を目の前から追い払う態度へと。

その急激な変化を、牽牛は注意深く観察する。織女が戻らぬ理由をそこに見出そうとする。

天帝が邪険に手を振った。最早視線すら牽牛に向けていない。視界に入れるも疎ましいとばかりに。汚らわしい言葉を口にするような語調で天帝は言った。

「下がれ」

「……　御前を失礼させていただきます」

牽牛の胸中の黒い疑念が形を成しつつあった。だが彼は

（まさか　……）

それを認めたくはなかった。それはあまりに恐ろしい　おぞましい発想であり、そのようなことを考え付いた自分すら汚らわしく思えるほどだった。

（陛下は天界でもいと貴き方　そのようなことをなさるはずがない、とは、しかし言い切れない。それは、考えるだけですらあまりにも不敬で、しかれども

葛藤のため周りへの注意が疎かになり、牽牛は宮城の門をくぐる時、官女と危うくぶつかりそうになった。転びそうになった官女を腕で支えながら牽牛は慌てて謝った。

「あ　これは失礼を」

「牽牛様」

官女は押し殺した声で囁いた。

「姫様より書状^{てがみ}を預かっております」

「……」

牽牛は思わず官女を見返す。官女は官服の袖で顔を隠すようにしてさらに囁いた。

「人目につかぬところでお読みくださいませ」

すると、牽牛の袖口に紙を忍ばせ、官女は足早に宮城の中へと戻っていった。その後姿を強いて見ないようにしながら、牽牛も自然と足早になった。

肆

愛しい方、わたしの夫君

懐かしい筆跡てでそう書かれているのを見て、牽牛の涙腺は緩みかけた。

やはり、牽牛は正しかった。織女は自分を愛している。

だが、長い書状を読み進めるにつれ、幸福な気分は雲散霧消していった。

愛しい方、わたしの夫君

今日もまた貴方に会えぬことを嘆き涙が絶えませぬ

このままではいずれ涙が涸れてしまうでしょう

このようなことになったのもすべて、ああ、その字を綴るも厭わしい、我が父の手によるものです

貴方は私が貴方の元に帰らずにいる理由をどう聞かされておいででしょうか

貴方の元に帰らない私をどう思いでしょうか

父は何も知らずにいた私を宮城に呼び出し、そして幽閉しました
貴方と離縁せよと言われた私がそれを拒んだからです

貴方のように卑しい身分のものは私にはふさわしくないというのが父のいう離縁の理由です

しかし、私の愛しい夫君、私がどうしてあなたと離れることができましょうか

これほど愛しておりますのに

そう申しますと、父はかつてないほど激昂しました

そして、その醜惡な本心を曝け出したのです

今思い出しても身震いせずにはいられません

なんと恐ろしい

忌まわしい話でしょうか

「陛下、ただいま御前に罷り越してございます」

「おお、織女か」

天帝は上機嫌に、自ら招いた愛娘を出迎えた。

「遠路はるばるご苦労だった。今宵はゆるりと休むがいい。部屋も準備させておる」

「畏れながら、陛下」

跪礼したまま、織女は相変わらずの父に苦笑した。まったく、自分を猫かわいがりするところは嫁入り前と変わらない。

「妾も今や一人の男の妻。妻たるものとして、長く我が家を空けておくわけにはまいりませぬゆえ、我が夫の待つ家に帰るつもりであります。お心遣い痛み入りますが、その必要はございませぬ」

「……そのことだが、織女、話がある」

突然深刻な口調になった天帝に、織女は当惑した。急に「そのこと」と言われても何のことだかいまいち織女には理解できなかった。

「いったい……何の話でしょう」

「しばし、待て」

そう言って天帝は人払いを命じた。二人きりになると、天帝は切り出した。

「そなた　牽牛の元を去り、天の宮城に帰り来よ」

思いも寄らなかった言葉に、織女は束の間絶句した。

「　離縁、せよと仰いますか」

「そなたらを見ていて、やはりそなたと牽牛は合わぬのではないかと思うてな」

「そのようなことは決して」

父の言葉を織女は強く否定した。

「妾と夫は、我ら自身思うてもみなかったほどに良き夫婦にございます。離縁など、思いも寄りませぬ」

「しかし、やはりそなたは貴き身分の育ち、一方牽牛は一介の卑しき牛飼いよ。何かと問題はあるのではないか」

身分の差にも拘らず牽牛と自分を娶わせたのは、天帝自身。それでも、牽牛と契りを結んだ当初はやはり不安があったのか、何度も何度もそのことについて尋ねてきたが、二人が円満な夫婦関係を築いていることが確かになってからはそれも絶えていた。

それをなぜ、今更持ち出すのか。

腹立ちにも似たものと、微かな不安が胸に兆した。

「ごさいませぬと、再三申し上げたはずです」

やや強い口調で織女は言い切った。

「それだけがお話でございましたら、妾はこれで失礼させていただきます」

「あの男の元へ帰るか、織女」

天帝の声音が変わった。低く暗く、粘着質に絡みつくような、声。聞いたことのない父のその調子にぞっとするものを感じて、織女は思わず父の顔を上げた。

そして、覗き込んだ天帝の目の中に、冥い、底知れぬ闇を見た。

伍

「へ、いか」

「そなたの父であるこの朕を置いて、あの男を取るか、織女」

「何を仰いますか、妻たるもの、夫の下へ帰るは至極当然のこと」

「夫婦めおと」

天帝は嘲笑するようにその言葉を吐き捨てた。織女にとってそれは大切な言葉。織女と牽牛が愛し合い、それが認められる関係であると言う証の言葉。それが、ひどく汚されたように感じた。穢されて、その汚いものがねつとりと織女の頬を撫でる。冷たい汗が背を伝い、手が震えた。

（いや、だ）

「あの男が愛しいか、織女 身分違いのそなたの夫面むつめんをしておる、あの男がよ……」

くく、と喉の奥で天帝は笑った。織女は思わず膝立ちになって後ずさる。

「織女もいつまでも独り身で機織ばかりとは哀れだと、いくら大臣たちがうるさく申したとて、そなたを嫁がせたのは、やはり間違いであつたやもしれぬな、織女、我が娘よ」

片頬を歪ませた笑みは、押し殺していた狂気の発露か。

「そなたは我が手中に置いて外に出すべきではなかった。他の男の下へやるなどと、それもあの屑のような男にくれてやるなどと、考えるべきではなかった。身分の低い男になどすぐにでも飽いて帰ってこようと思つておつたのに」

「陛下、まさか よもや恐ろしいことをお考えでは」

「恐ろしい？ 父が娘の所有を欲して何が悪い。朕は天で最も貴き者、その朕が天で最も美しきものを欲して何が悪い」

「なんてこと」

顔から血の気が引いていくのがわかった。

この男は

「織女、そなたは我が娘……朕の物だ」

天帝は自分の娘を、欲しているのだ。

「織女よ」

昏い視線が織女を舐め回す。蛇のようなものが全身を這いずり回るのに似た感覚を覚えた。

（穢される）

織女は己の身体を庇うように腕を身体に回した。それでも視線に身体を撫で回されるような感触はやまない。目に見えないそれを振り払いたい衝動に駆られた。

（狂っている）

このような男が天の支配者か。このような男が自分の父か。

吐き気がこみ上げた。

立ち上がった足が震えた。これでは走るところか歩くことすら覚え
束ない。

声が震えた。強気を装ってみようにも、口の中がからからに渴いで、引き連れたような声しか出なかった。

「か 帰ります」

「ならぬ」

天帝は傍らの紐を引いた。どこかで場違いに軽やかな鈴の音が鳴り響き、あつというまに側近の官人たちが現れる。

「織女を部屋へ連れてゆけ」

「貴方たち！」

織女は無理やり声を張り上げた。

「陛下の命を聞いてはなりません、陛下はご乱心であらせられます
！」

「無駄だ織女」

織女に群がる官人たちの向こうに隠れた天帝が声を上げて笑った。

「こやつらは心得ておる」

「なんと」

織女は己を取り囲む者達を見回した。皆一様に表情も変えず、淡々と言いつけられたまま織女の腕を掴み引きずっていく。織女のか弱い力では抗いもほとんど意味を成さない。

「なぜ止めぬのです！？ 斯様におぞましきお考え、非道な振る舞いを許すのです！？ 主に諫言するは臣の務めでしょう！」

「望むものをいくらでも与えると約束すれば、人はいとも容易く口を噤む。我が命に従う」

「貴方たち 官としての誇りも忘れましたか！」

愕然として叫ぶ織女の言葉を、満足げな天帝の笑いがかき消した。「さあ、織女、これでそなたは朕の物だ」

部屋を引きずり出される前に、天帝の声が最後に耳に届いた。

「もう二度とあの男になど会わせぬぞ」

囚われた。

織女は自分が闇に捉えられたことを知った。

陸（前書き）

死ネタ入ります。苦手な方はご注意ください。

陸

それ以来部屋に閉じ込められたきり外に一切出してもらえず、毎日の天帝が訪れるかと怯え、気が狂いそうな日々である、ただ世話をしてくれる女官は昔からの顔馴染みで織女を哀れんでくれるので彼女に書状を託すと、認め^{したため}られた書状は、こう結んでいた。

愛しい夫君、こうして怯えながらもわたしは貴方のことを日々思い出します

父がそう望む以上再びお会いできぬ身かも知れませぬが、それでも貴方を愛していると、貴方がわたしを愛してくださると思うと、立ち向かう勇氣がどこからともなく湧いてきます

わたしの愛しい方、どうかわたしを信じてくださいませ
二度とお眼にかかれぬかもしれませぬが、わたしは一生貴方だけを愛しております

「吾妻^{あつま}

」（「私の妻」）

小さな呟きが牽牛の口から漏れた。

選んだ日は上弦の月の晩であつた。月は早い刻限で沈み、下界で月が出ていないと天界も暗いからである。闇に乗じてことを為すつもりであつた。

天の絶対支配者である天帝に剣を向ける者など、天界において皆無である。天の宮城の警備が名ばかりで、兵はほとんど存在せず、ほんの少数の彼らも退屈そうに噂話に興じているばかりなのも、仕方が無いことであつた。

それゆえに、牽牛がその気になれば、ほとんど労することもなく宮城内に忍び込むことができた。

織女が宮城で使っていた部屋のことは、二人で暮らすうちに何度か聞いたことがあったので、見つけることは大して難しくはなかった。辿りついたその戸は、しかし他所とは打って変わって嚴重な警備体制が敷かれていた。軟禁しているのだから当然といえば当然かもしれないが、それにしてもなにやら慌しい。衛兵たちは顔色をなくし、落ち着きなく辺りを見回しては押し殺した声でひそひそと囁きあい、首を振っていた。

何か、事件でもあったのだろうか。牽牛の胸がざわついた。織女は無事だろうか。

装飾や置物の多い宮城のこと、隠れる物陰には事欠かなかった。身を潜めたまま、牽牛は耳を澄ませるが、ほとんど何も聞こえない。「ともかくも、急ぎ陛下にお知らせせねばならぬ。行くぞ」

誰かが、いでたちからして衛兵たちの長官だろうか、虚勢を張ったとしか思ぬ大声で指示を叫んだのが聞こえた。声の調子がおかしい。狼狽が明らかだ。蒼褪めた衛兵たちは躊躇いがちに、その指示に従い、一人の見張りを残し、あとはどこかへ撤退していった。

一人残された見張りには、しばらくうろうろと所在なく歩き回っていたかと思うと、戸の前で座り込んで頭を抱えたり、やはり落ち着きない。

「どうして、こんなことに……」

衛兵が絞り出すようにした言葉が、こっそりと近づいた牽牛の耳に届いた。

その衛兵は落ち着きなく左右を見渡している。何かを見つけようとしているよりは見つかるまいとしている風情だったが、牽牛にとってはあまり変わりない。彼は戸から入ることを諦めた。

だが、まだ手はある。まるで盗賊のようで、好ましくはないが。相変わらず身を隠しながら、牽牛は中庭に出た。織女の部屋の窓は中庭に面していると聞いていた。そこからの眺めが好きだったと、

織女は何度も言っていた。

窓には見張りはいなかった。牽牛は小さく安堵の息をつき、窓枠に手をかけた。

窓を開けるなり、腥い臭いなまぐさが鼻を突いた。

窓を閉ざしていた布をのけた瞬間、見たこともない光景に、予想だにしまった光景に、牽牛はただ硬直した。

何を見ているのか理解できない。ただ視線が空しくその場を撫でていくのみで、それが頭に入らない。いや、頭が受け付けられないのだ。その、暗赤色を。

部屋を中心に塗り潰してぬらりと光るものの正体を。

そこに広がるのは最悪の惨事であるという事実を。

「あ、づま」

落とした言葉は掠れていた。

彼の最愛の妻は部屋の中央で己が胸を懐剣で貫き息絶えていた。

漆

「何、故」

踏み出した足は広がり乾きかけた血にねちやりと沈み込み、足を持ち上げるとまたねちやりと音がした。

床に着いた膝が粘性のある血で滑りそうになった。

妻の身体に触れた指があまりの冷たさに震えた。

ぐるぐるぐるぐると思考が空転する。

そのようなことがあるはずがないそのようなことがありえるはずもないそのようなことがそのようなことがおそろしいことが

ならばこれはなんなのだゆめまぼろしかしかしこのにおいこのひかりこのいろ　そしてかのじよのましろいかおひかりのうせ

たひとみちからなくおちたうであかくそまるゆびさきみだれてあかいいけにおよぐくろかみ。

今は硬く冷たい彼女の瘦躯を、牽牛は両腕で抱きしめた。胸に刺さっていた剣が滑り落ちるのを思わず掴んで握り締めた。

はあ、はあと自分の息の音がやけに大きく聞こえた。心臓の鼓動が身体中に鳴り渡っているように感じた。

何が起こったのか。

手がかりを求めて辺りを見回すと、壁際で女官が織女と同じように自害し果てていた。どうやら彼に書状を託した例の女官だった。

おそらくは主の後を追ったのだろう。二人分の血で塗られたせいで部屋がやけにあかく感じられたのだ。

牽牛は妻を再び横たえ、立ち上がった。

戸を内側から開けられて、予想もしていなかったのだろう、死体が動いたとも思ったのか、見張りの男は「ひいつ」と怯えた声を出し、みつともなく四つん這いになって無様な格好で逃げの体勢を取った。見上げて、あまりの衝撃に表情を浮かべることすらできな

いまま牽牛を見つけ、男はぽかんと口を開ける。

「牽牛、殿」

「妻に、何が、起こったのか、お教え願いたい」

見張りの男の首筋には、いつの間にか血に濡れた刃が突きつけられていた。

誰が、予想しただろうか。

穏やかで物静かな青年に、そのような激情があつたことを。たかが牛飼いの青年に、そのようなことが為せたなどと。

顔色を無くして天帝の執務室に飛び込んできた臣下に、天帝は眉を顰めた。

「へ、陛下……姫様が……姫様が……」

言葉を失った臣に続いて室に駆け込み、ぶるぶると全身を震わせ、床に額を擦り付けて這い蹲る男は、天帝の娘、織女の身辺警護の責任者であつた。裏返った声で何度も何度も謝罪する。嫌な予感が全員^よの胸を過ぎる。天帝の表情が険しくなった。

「申し訳ございません、申し訳ございません、ほんの僅か目を放した隙に……！」

「早う申せ」

側近の一人が冷たく言いつけた。言葉に打ち据えられたかのように男は小さく飛び上がり、見ていて哀れなくらいに縮こまって言った。

「姫様が……自害なされました」

「な……」

部屋の中の人間は一様に絶句した。

「ま、さか……朕の……朕の織女が、そのような……」
思わず立ち上がった天帝の唇がわなないた。

真つ先に我に返った誰かが、男を怒鳴りつけた。

「何をしていたのだおまえは！」

「もうしわけございませんっ！」

悲鳴のように裏返った声で聞くに堪えない謝罪を続ける男を、容赦なく蹴りつけておいて、側近が天帝を振り返った。

「陛下、この男の処断は如何いかなされますか」

「……連れてゆけ」

ひい、と這い蹲った男から情けない声が漏れた。天帝の命、それはすなわち 殺せと。

お許しください、お許しくださいませとみつともなく泣き叫びながら力づくで連れて行かれる男を見送って、側近たちは吐き捨てた。
「陛下の至上命令、姫君を守るという職務すら全うできぬ者など、生きる価値もないわ」

「……」

天帝は物も言えず座り込み、両手で顔を覆った。痛ましげに、側近たちが慰めの言葉を口々にかける。

さらにその側近たちを見つめながら、未だ良識ある者は思った。

（それが姫君にとっては最善の道であつたかもしれぬ）

最愛の夫と永遠に引き裂かれ、穢れた想いを抱いた実の父に怯えて生きるよりは。

長い籠の鳥の生活からようやく解き放たれ、幸せな生活を与えられたというのに、それすらも奪われて自害の道しか選べなかった姫は、あまりに哀れだった。

天帝が顔を上げた。ほんの束の間に倍も歳をとったかのような顔に誰もがぎよっとする。

「なぜ……なぜだ、織女」

声すらしわがれていた。

「織女に……朕の織女に一目会えぬか。もう一目あの姿を見たい」

「陛下……」

いたたまれぬ風に側近が声を失った。

そこへ、再び動転した様態で駆け込んでくるものがあつた。

「申し上げます、宮城が燃えております！ 陛下におかれましては、
急ぎお逃げくださいませ！」

捌

「宮城が　！？」

重なる非常事態に、誰もがうろたえた。

「西の対及び南の対、すべてに火の手が回っております。この中央の対に火がくるのにもさほど時間はかかりませぬ、急ぎお逃げになつてくださいませ」

東西南北、それぞれの棟と、中央の建物で成り立っている天の宮城、そのうち二棟が燃えているのだ。

「出火の原因は」

「未だ詳細はわかりませぬが、おそらくは」

報告する官人はごくりと生唾を飲み込んだ。

「放火かと」

「何者かが火を放ったのか　」

「火の巡りが早すぎます。その上、場所によって炎の激しさに差が非常に巧妙な方法で人々は無傷で逃げ果せられるようにしておきながら、各棟を効果的に分断しております」

天で最も重要で高貴な建物に、火を放つ。

天界全体を混乱に落としいれ、天帝の命すら危うくする行為である。

いずれ犯人が捕まれば、死罪は免れないだろう。親類縁者にも累が及ぶこと確実である。

「とにかく、陛下、早くお逃げにならねば」

「あ、ああ　」

促され、頷いて天帝がよろよろと立ち上がったとき、廊下で激しい悲鳴が上がった。

「わあああ　」

「おのれ、これは陛下に対する反逆　があつ　」

「何事ぞ！」

火事の最中の騒乱に、さすがに天帝も動揺して声を高くした。周囲の側近たちも泡を食って顔を見合わせるばかりで、誰も様子を見に行くことすらしない。そのうちにも、悲鳴は執務室へと近づく。執務室の扉を、絶るように開けて血まみれの官人が転がり込んできた。

「へ、へ、いか……お逃げ、くださ　　！！」

背に斬撃を受け、断末魔の悲鳴にその言葉は絶たれた。彼の手が力なく、己の血で扉に赤い軌跡を描く。

一気にその場は狂乱の様を呈した。己の掌中にあつたはずの宮城で起きている惨劇に立ちすくむ天帝の脇を走り抜け、官人の屍が転がる扉から逃げるように、唯一の出口である窓に皆が殺到した。誰かが裏返って甲高い声で叫ぶ。

「衛兵　衛兵！！」

「無駄にございますよ」

その場に似つかわしくない静かな声が、その場の空気を凍らせた。意味の無い言葉を喚き散らしていた者は急に口を閉ざし、狂ったように周りの者を押しのけて暴れていた者はぴたりと大人しくなる。狂乱が収まったわけではない。抑え付けられているのだ。

その、重さ。

声の、ずっしりとした重圧に、凍てついたかのように誰もが動きを止められていた。動けずにいた。

しんと静まり返った室内に、怯えた官人たちの荒い息の音だけが聞こえた。いや、そこに微かに混じる、炎の爆ぜる音。火の手が近づいてきているのだ。

火炎に対する恐怖が渦を巻いて膨れ上がり、暴れだそうとしている混乱と怯えと狂気が、見えない手の下に抑え付けられている。

「先ほど中央の対の門にも火を放ちました。全員火に撒かれる前に前に逃げ出しております　残っているのは、ここに居る方達だけです」

扉の影から聞こえる聞き覚えのあるその声に、天帝は唇を震わせ

た。

「そ　そなた」

体中から血を滴らせ、剣を手に姿を現したのは、誰あろう　牽牛だった。

その背後に、赤い炎が踊り狂っている。逆光で黒い影に見える牽牛は、さながら幽鬼のようだった。

幽鬼は扉の脇によって退路を指し示す。

「邪魔をしなければ、陛下以外は見逃しましょう。疾くこの場を去りなさい」

その言葉に、言葉に籠められた力に、弾かれたように、官人たちが物も言わずに、競って扉から逃げ出していった。牽牛の視線を受けるのに精一杯で、天帝は非情な臣下たちを止めることもできなかった。あっという間に慌しさは去り、部屋には牽牛と、見捨てられた天帝の二人のみが残された。

玖

「き、貴様　なぜ」

「なぜ？」

聞き返して、くつくつと牽牛は笑った。幽鬼が嗤う。しかし天帝を見据えたその視線は幽鬼どころか修羅にすら見えた。かつて天帝が彼を選んだ基準となった気の弱さ、温厚さは影も無い。

「この世で最も愛する妻を奪われた男に、なぜとお訊きになりますか、陛下」

「なぜ、それを」

「この世の人すべてが、陛下の思うように動くとはお考え召さるるな。我らを哀れと思い、手助けしてくださる方もいるのです」

「助力があるのか」

この天の宮城において、天帝に刃向かう者があるとは。

「誰だ、吐け」

天帝はあらん限りの虚勢をかき集めて居丈高に命じたが、牽牛は鼻で笑うばかりであった。つい先刻まで卑しき牛飼いと侮っていた者に、逆に侮られるは不快であり　されど、なぜか天帝は戦慄した。

「知ってどうなさるおつもりですか。死罪にでも？　死人が死罪を命じる、なかなか面白い趣向ではございますが、誰も従いはしないでしょうね」

言葉の意味は明らかだ。これは修羅だ、悪鬼だ。かつての婿の姿を借りた魔の類いであるに違いない。風貌ばかりは優男である男の血塗れた言葉に、天帝は怖気づいた。

「何だと……牽牛、貴様、朕を弑する気か！　気でも触れたか！」

「実の娘に邪な想いを抱き、それを恥じること無く隠すことも無く至当とばかりに曝け出す、醜悪なその心根　そちらのほうが狂気と呼ぶに相応しい」

修羅が 牽牛が一步踏み出し、天帝が一步退く。

「私はただ、実の父に汚されるを恐れ、夫への貞操を守り抜くためにその命を自ら絶たざるを得なかった妻の無念を、夫として晴らしに来たのみ」

「そ、そなたも織女の死を知っているのか」

天帝は己の浅ましさを恥じる様子もなく、ただ情報が漏れていることにのみ狼狽した。

「あなたにはわかるまい、最愛の妻を迎えに行つて、冷たく物言われぬ屍に迎えられた絶望は」

感情を微塵も感じさせない声音は内から溢れ出る激情を抑えすぎた結果。

炎が迫り来ている。熱波が牽牛の背を圧しているはずだが、彼はそれを意にかける様子も無い。

そつと、牽牛は剣を持たない片手を上げて腰帯から垂らした黒い束に触れた。明々とした炎の光を受けて赤く照るそれは、艶やかな長い黒髪。

「それは、織女の」

「遺髪です」

その一言だけは、愛しいものに語りかけるように優しくかった。

「さあ陛下」

牽牛はいつそ楽しみに微笑んだ。彼の血に濡れた顔を一筋の涙が伝う。羅刹が微笑んだかのようなその凄絶な笑みに、天帝は金縛りにあつたように動けなくなった。

「炎で焼け死ぬより先に、わたくしがあなたを殺さなくては」

牽牛が近づいてくる。しかし天帝は動けない。炎の熱で空気が歪み、陽炎のように牽牛の姿は揺らめいた。

剣を振り上げて牽牛は嬉しそうに笑った。

「願わくは輪廻の末にあなたがけつして我妻とは同じ地へたどり着かぬことを」

いいえいつそ未来永劫輪廻の中で苦しみ続けねばいい

炎の帳が降りて、修羅の絶叫を包み込む。

壹拾、そして結

その夜、燃え盛る天の宮城を取り囲んで固唾を吞んでいた者達は一様に驚くことになった。

その頃には誰もが事情を知っていた。いや、もとより天帝の狂気の行いは、宮城の中ではほとんど誰もが知る暗黙の了解だったのだ。諫言をしたものが居なかったわけではない。だが、その夜宮城の炎上を見守るものの中にはいなかった。

皆、天帝に刑されたのだ。

それを見て怖気づき、保身のためそれを止められなかった自分を責めるもの、恥じるもの、己には関係ないと傍観を決め込んでいたもの、与えられる恩恵のために口を噤んでいたもの。

その晩、そこにいたのはそういうものばかりであった。

まるで妻を奪われた男の激情をそのまま映したような炎は夜空を焦がし、勢いは留まることを知らず、誰もが圧されてその場を立ち去ることもできない。

突如、地の底から轟音が響いた。音とともに地が揺れる。

天は地震を知らない。

天人たちは何事かと怯えて己の足元を見た。見たところで何がわかるわけでもなく、恐怖のざわめきが高まっていく。

高らかな声がそのざわめきを貫いて響いた。

「宮城が――！」

皆が一斉に宮城を顧みて、驚嘆の声を上げた。

炎に包まれた宮城が、崩れ落ちていく。まるで誰かが図ったかのように、四方を別棟に囲まれた、中央の対が、綺麗に真つ二つに割れた。

そして、その崩壊の中心から、炎の渦を裂いて、白いものが飛び出た。

「何、あれ――」

怯えも入り混じった呟きの答えはすぐに与えられた。

「水だ！ 水が、溢れ出ているんだ！」

どこから湧いたものか、清らかな水の奔流が渦巻く白い怒涛となり、炎の城を引き裂いた。奔流は炎を押し流し、城から溢れ出て、行き場を求めて四方へ伸びた。白い腕は伸び続け、事を見守る群衆にも迫っていく。

「こっちに來るぞ！」

「逃げる、高台へ！」

大混乱が起こる。荒れ狂う竜のように押し寄せてくる流れを避けて人々がいくつかの群れに分かれ、高みを求めて移動した。

ようやく安全な場所へ逃れ、振り向いた者が嘆息を漏らす。

「ああ 川が」

白い流れは恐ろしい速さで陸地を侵攻し、人々の塊を分断した。恐怖に悲鳴が上がる。

「ああ、あちらに私の子が！」

「俺の母はどこだ、こちら側には居ないのか！？」

「兄さま 兄さま ー！！」

人々は半狂乱で見失ってしまった親しいものを、恋人を、家族を探し始めた。混乱の中で誰がどこにいったのかはさっぱりわからない。

「これは、報いか、牽牛、織女 ー」

川に阻まれ、離れてしまった己らの大切な者たちを遠くに見ながら、呟いた者があった。

「愛しき者を奪われる悲嘆、引き裂かれる苦痛、二度と会えぬ艱苦を、我らも味わえと ー」

川は天界すべてを二分した。

引き裂かれた者らは数知れず、数え切れぬ涙が流された。そして事情を知る者は口々に語る。

これは、報いだ、と。

織女と牽牛、二人の悲哀を知りながら、見て見ぬふりを続けた報いだ。

しかし年に一度、なぜか川に舟が渡される。天界にかかる上弦の月が舟となり、どこからともなく現れた鵲かささぎが舟をひいて人々を運ぶのだ。

諸説あるが、一般にそれは、牽牛と織女が二度と会えなかった自分たちの代わりに、人々に再会を喜んで欲しいが為に渡した舟だと言われている。そして鵲は二人の思いの化身だと。

愛しい人に二度と会えぬ悲劇を繰り返さない、二人の最後の慈悲だと。

天界を二分し人々を裂く川。

下界の人間たちがその川を指して呼ぶ言葉は少なからずある。

銀河。銀漢。雲漢。天漢。河漢。星河。そして、天の川。

下界に伝わる伝説では、再会を果たすのは織女と牽牛だということである。

壱拾、そして結（後書き）

長ったらしい話でしたが、最後までお読みいただいております。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7756g/>

天河に落ちる

2010年10月8日15時19分発行